

特定非営利活動法人 日本ハンザキ研究所 会誌



あんこう

第7号

平成23年9月発行

「あんこう」は、オオサンショウウオの当地方の呼び名です

巻 頭 言

シリーズ理事長の足跡

- オオサンショウウオの調査研究（7） _____ 1
〈ハンザキと河川工事 ③市川水系竹原野地区②〉
理事長 栃本 武良

イラストスケッチ

- ハンザキとの出会い（その4） _____ 8
研究員 田口 愛子

オオサンショウウオあれこれ

- 又シから陥落した雄ハンザキ _____ 10
副理事長 岡田 純

- 第5回ヘルベンダー・シンポジウムに参加して _____ 12
研究員 田口 勇輝

- 『中国両生動物彩色図鑑』の和訳 _____ 14
研究員 増子 善昭

話題など

- カエルに思う _____ 17
理 事 鞍田 悦子

- 日本ハンザキ研究所のIT事情（3） _____ 18
理 事 黒田 哲郎

雑言・提言・独言

- 食と命を考える _____ 19
会 員 田淵 光

連載（サンショウウオの古名と地方名）

- （9）見世物としてのオオサンショウウオ _____ 20
研究員 池上 優一

イベント報告

- 23年度前半のイベント _____ 26
事務局長 奥藤 修

編集後記（編集長 黒田 真澄）

巻 頭 言

第3回 NPO 法人通常総会が5月22日に無事終了しました。総会の結果を受けて兵庫県への報告が提出されました。これで一年間の業務が終了ということになりますが、早速新年度のイベントが始まります。総会では副理事長の交代がありました。副理事長は理事長に事故があったときには、法人を代表してリーダーシップを発揮していただかなくてはなりません。前任の大沼さんは全国を飛びまわっての仕事が忙しいと言うことで交代していただきましたが、今後も理事として係わってくださることになりました。新副理事長には鳥取県在住の岡田 純（すみお）博士（鳥取大学・研究員）をお願いしました。まだ40台の若い岡田さんには私の後のハンザキ研を背負って立っていただきたいとの思いであります。少々遠方ではありますが無理をお願いいたしましたので、皆さんと共に盛り立ててハンザキ研の将来を磐石の物にしておきたいと考えています。

NPO 法人は雨後の竹の子のように現れては消えていくのだそうです。その第一の原因は後継者がいないことで、第二は資金面での弱さがあり、第三は総会や報告、イベント対応など素人集団には慣れないことが多く、設立時の氣勢が弱まるためのようです。その轍を踏まぬように布石を打っておきたいと思えます。その一つとして新役員に女性が3人と増えましたが、新しい風を吹き込んでほしいと思っています。

見学希望の方には予約をお願いして半年が過ぎようとしています。これも結構予約が多く、予約なしの飛び込みの方も相変わらずで対応が大変です。作業ボランティアの公募も意外な応募状況が嬉しいことです。それは、公募しても常連のスタッフくらいになるかと思っていたのですが、6月13人、7月14人、8月はイベントが忙しいので中止するつもりだったのですが、1人の申し出がありました。約半数が会員以外の人なので驚きました。今後もよろしくお願ひしたいと思えます。

会員の方も、最初からのメンバーの中には無理やり義理でご支援くださった方も多かったことと思えます。4年目に入って会費未納の方々へは長い間のご支援に感謝しながら年度末には退会と言うことで整理させていただきたいと考えています。その一方では、現在の最高の資金援助額に合わせて大幅な会費の口数増加をしていただいた例もあります。私どものこの数年間の活動状況をご覧になって、本物としての評価をしてくださったことと思ひ大変に感謝しています。多くの方々のご支援を受けつつ期待に応えることができるように今後とも頑張りたいと思っています。



平成23年9月30日

NPO法人 日本ハンザキ研究所

理事長 栃本 武良

オオサンショウウオの調査研究（7）

〈ハンザキと河川工事 ③市川水系竹原野地区〉

理事長 栃本 武良

竹原野地区と言うのは生野ダムのすぐ下流にある地域である。市川は朝来市生野町に源を発して、約70km流れ姫路市に河口を開き瀬戸内海に流入する2級河川である。ここ竹原野は市川がダムによって分断され、下流側のハンザキが集まっていく水域でもある。川の右岸側の山が“ズツ”くるために川が押し曲げられ、ほぼ直角になって流れる。川沿いの道路は切り立った断崖に挟まれてやっと車がすれ違うことができるほどの狭さだ。冬になって雪が降ると除雪車が走り、歩道はかきよけられた雪の山に埋もれてしまう。この山の中には3本の井戸が掘られていて、土中の水を抜いている。さらに山の“ズリ”を押さえて流れを元のところへ戻し、道幅を広げる工事が計画された。事前調査では250個体ものハンザキが確認されたので、工事期間中は救出して飼育管理することになった。兵庫県養父土木事務所の下に委員会が開かれて対策を検討することになった。そして委員長権限(?)でハンザキ研に残されていた児童用のプールを改造し、ハンザキを收容することになった。ハンザキ保護センターの出現である。

平成19年11月14日から、文化庁長官の原状変更許可を得て救出作戦が開始された。第一陣は27個体、捕獲されて運び込まれたハンザキはピンヘッドが多いことが印象に残った。ピンヘッドとは餌不足で体が痩せて細くなった姿である。頭部は頭蓋骨があるので細くならないので大きいままなのだ。それがピン(針)の形に似ているところからの呼び方である。突然に捕まえられて全く違った環境に入れられたばかりなのに、彼らは捕獲に使用したトラップ“カニ籠”に残された餌を与えるとすぐに食い始めたのである。どうも、この大型の動物を支えるだけの餌動物量が不足していたようだ。

その後順次捕獲されたハンザキが増えていき、

10夜で57個体が收容された。これは、0匹が3夜続いた時点で終了と言う当初の予定通りであるが、自然の川から全ての個体を捕獲するのは困難なので致し方ない。残念だったのは事前調査で登録されて私が名付けた“ツチノコ・ハンザキ”が收容できなかったことだ。この個体は幻の動物“ツチノコ”そっくりの体型をしている全長70cmのハンザキである。大きな餌を食って大きな腹をしているのではなく、コチンコチンに硬い体をしていると言うので病気か奇形かと思うが、まだ生きているのだろうか？ マイクロチップが埋め込んでいるのでスマートになっただけでも分かる。その内にツチノコ探検隊を組織して追いかけてみたいものだ。

工事が開始されてからも、重機で動かされた岩の下から飛び出してくるハンザキを收容したり（これは実際には中々危険な作業であり今後については考えてみなくてはならない作業だった）、瀬替えで水を抜かれてあわてて隠れ家から出てきた個体などを救出していった。最終的には100個体を救出したが、事前調査の数には遠く及ばなかった。それと、幼生も25個体（内0才5匹、1才19匹、2才1匹）收容できたが、多くは生かすことができなかったのも残念なことであった。0才幼生は事前調査でも確認できていたので産卵・孵化は行われていることの証明になるのであるが、問題は1才以上の幼生が見つかるかどうかということである。それは、次世代が育つ環境であるかどうか判断するための重要なポイントであるからだ。当初の調査では全長10cmほどの2才?の幼生が1匹捕獲された。後に川を付け替える時に水を抜いた旧・河川部から同様のサイズの幼生が19匹收容された。これは岸辺のササ藪の根元から、まとまって出てきたので良い生育の環境であったのだろう。しかし、それ以上のサイズのハンザキは31cmが1個体のみで、次世代の成育が危ぶまれる状況でもあった。

收容されたハンザキは、月に1回の健康診断を行い個体の確認と餌不足、餌取りできない個体、

傷病個体の隔離を実施した。毎月測定するのはストレスを与えるのではないかと心配したが、問題はなかった。しかし、ハンザキの扱いに慣れた人ばかりではなかったからか、健康診断の数日後に何の外傷もないのに死亡してしまったのが3匹あったのは反省点だ。もっと厳しく注意をしなければよかったと思うが、毎年変わってしまう入札によって受託した会社の職員がどの程度の経験者なのか分からないので、こんなことになってしまったと考えられる。税金で委託するのだから公平性のためにも入札制度は必要だろうが、死なせてしまっただけではお仕舞いなので、このような事例は考え直さねばならないと思う。

沢山のハンザキを狭いプール（自然の川に比べれば仕方ないが）に長期間収容することでの最重要問題は流行性の疾病の発生だ。両生類の病理学は全く遅れているので万が一そのような病気が発生するとお手上げになってしまう。ひところ騒がれたカエル・ツボカビ病もそうだが、よく調べてみると本来の生息河川に存在したカビなのであった。ハンザキにも付いていると言う事で、高い薬品と煩雑な手間をかけてのカビ除去の実験も行われたが、生息河川で普通に存在するカビであれば、除去しても川へ戻せば再び付くことになるだろう。第一、カビがついていても何の症状も出ていなかったのだ。しかし、今回は初めてであるが感染が疑われる皮膚の腫瘍が急激に発生した。これまでも多数のハンザキを数年間収容したことがあったが、幸いなことにそのような事態は起こらなかった。飼育を始めて3年になる昨年の8月に次々と発症個体が見つかったのである。運のいいことに苦し紛れのイソジン塗布が劇的に効いて2個体の死亡で終わった。生きたまま獣医系の大学へ送った個体も実験中に死亡したが、結局原因は不明のままであった。

もう一つは、これまでの事例の収容施設では水源が湧水であったために、年間の水温変化があまり無かった。そのためと考えられるが繁殖が見られなかったのである。しかし、今回は繁殖地の川

の水を汲み上げて飼育することなので、必ず繁殖するだろうと思っていた。性的な興奮状態になるとオスは互いに咬み合って負傷したり運が悪いと首を咬みきられて死亡することがある。この狭いプールでそんなことが起こったら隔離隔離で大変なことになると心配したが杞憂に終わった。3回の繁殖期を過ごしたが、横の川では毎年繁殖行動が見られて、首切り死体も幾つか収容しているのに、プールでは静かな物だった。これは今後のハンザキの飼育下での繁殖を考えるのに参考になるのではないかと考えている。なぜ性的な活性化が起こらなかったのかを考えて見たいと思っている。飼育密度が高かったからなのか、産卵のための個室が無かったからなのか、それとも他に何か条件があるのだろうか？

飼育設備に関しても色々問題が発生した。河川からの揚水であるために濁流になるとプールの水も濁ってしまい動物を観察することが出来ない。更に大水になると取水設備内に大量の土砂が堆積してポンプが止まってしまう。この砂の侵入を防ぐ手立てはなさそうだ。重機が使える構造にしておけば楽だが手作業での砂出しは重労働である。9月の台風12号では2台のポンプが止まってしまう大ピンチとなった。道路も河川も災害復旧作業で建設会社も手が回らない。人間優先だからしかたないが、生き物を飼育している身にとっては黙って放置するわけには行かない。川の水が少し減ってきたのでジョレンを手で砂出し作業を行った。しかし、砂をほぼ浚ったのに揚水しない。諦めかけた最後に給水口から水中ポンプで水を逆流させた所ポンプが動き出した。3日間、止水状態で水中ポンプによる曝気だけで凌いだのだが、気温の低下と水温が20℃を下回る季節であったので助かった。また、落葉の季節になると大量の落ち葉が山から雨あられと降ってくる。オーバーフローを大きく立体形にしてこれも何とかクリアできた。雪掻きや屋根の雪下ろしも大変だった。観察と改善の工夫は生き物の飼育管理には無くてはならない事柄である。常に人が付いているなら

ばいいのだが、そう言うわけには行かないことも多いのが悩みの種である。これは生き物の管理ではいたし方の無いことだが、私が年間 350 日以上の滞在となるのはこの理由でもある。

河川工事の方は、山の裾に石を入れた鉄筋製の籠を積み上げてその重量でズリを止めるのだが、城壁のような空疎な外観になる。何年か前に一部施工された部分は石が丸見えで緑の景観の中で異様な感じをあたえてしまう。そこで今回の工事では石の間に土砂を詰めて植物が根を伸ばすことができるように工夫した。護岸の緑化の試みである。水はけが良すぎるのか、まだ緑の壁にはなっていないが、今後の成り行きを見つつ、植物の専門家の助言を受けて行きたいと思っている。左岸側の護岸には緑化ブロックと称する製品が多数使われているので、これからの比較が楽しみだ。ただ、このブロックに挿し木したネコヤナギを植えたものの、水当たりの激しい場所であり中の土ごと流されてしまった。これも今後の課題であるが、しっかり根を張るまでに大水があると飛ばされてしまうのが弱点だ。

石を入れた護岸の最下部にはハンザキなどの水生生物にとっての空間を確保するべく“はんざきブロック”が設置されている。これがうまく利用されれば昼間の休息の場と繁殖の場になるだろう。最下流に観察用の蓋付きの巣穴があるが、今月の台風 12 号で1つの蓋が飛ばされてしまった。満杯に近い生野ダムからの毎秒 100 トンを越える放水があったそうである。なかなか厳しい環境だ。里帰り①は6月20日に40個体を生野小学校の児童の手で実施された。素手でハンザキを抱えての放流に挑戦してもらったが、中には手が出せずに手網での放流をする子供もいた。素手での感触を体験してほしかったが、無理はしないで参加してもらったことでも良しと考えて、きっとこの中にも将来の生野の街を背負って立ってくれる人材がいるに違いないと願いつつ見守った。

里帰り②は、8月22日に地元竹原野地区の住民に声を掛けて参加していただいた。元気なお母

さんが張り切ってハンザキを抱えて放していたのが印象に残った。自然保護、自然環境の保全などといっても地域の人々の理解が無ければ成り立たないのだ。この日は全長 80cm 以上の大型個体 43 匹が戻された。ハンザキ研に残るのは左前足を咬み切られた個体と、右後足を咬まれた個体、腹部に大きなこぶができていた個体と幼生だけである。傷病個体は治り次第放流、幼生はマイクロチップを挿入できるサイズになったら放流ということになる。もう少し飼育管理しなくてはならない。

ほぼこの事業は終わったかに思えるだろう。しかし、肝心なのはこれからの追跡調査なのである。工事が終わって原状復帰したハンザキたちが快適な環境の再生として棲み付き繁殖し、次世代が育っていける環境になったかどうかを検証しなくては意味が無いのだ。少々だが、税金を多く使った環境保全工事であったと思うが、河川内の生物にとって本当に役に立った工事であったかどうか問題だ。役に立たないと言う結果が出て私がかまわないと考えている。それは次の工事に生かすことができるデータを追跡調査によって解明してステップアップすることが出来ると考えているからだ。自然相手の試行錯誤の状況であることを考えながら、何もしなければ永久に環境破壊は続いていくことになる。今ほとんかくトライすることが必要であると思う。全く役に立たなかったと言うことにはしない、していないとは思っている。一度破壊した自然環境を再生することは不可能であると思う。少しでもそのダメージを減らして行きたいと強く思う。

<参考文献>

- 栃本 武良 日本ハンザキ研究所ニュース
 (2007) 21: オオサンショウウオ保護センター
 22: オオサンショウウオの救出作戦
 23: オオサンショウウオ保護センター (2)
 23: 市川・竹原野地区の工事とハンザキ
 (2008) 25: オオサンショウウオの健康診断第一回
 26: ハンザキの救出作業
 31: オオサンショウウオの健康診断
 32: ウオジラミの大発生
 33: 兵庫県オオサンショウウオ保護センターでの繁殖は?
 (2009) 43: 保護飼育中のハンザキの滅失
 (2010) 56: 不気味なハンザキの伝染病?
 (2011) 65: 大水と砂の堆積
 66: ハンザキの里帰り
 68: ハンザキの里帰り②



写真 1 工事前 (2006.8 道路が狭く、除雪車が通ると歩道が埋まってしまう)



写真 5 工事に先立って観察会を実施 (2007.11)



写真 2 山がズッて来るのを井桁ブロックと石の
入った籠で押さえている



写真 6 工事開始 (2008.3 木工沈床部の水抜き)



写真 3 山の中に3本の井戸が掘っており、水を
抜いている



写真 7 市川本流では生きていけないカワナが
流れ込む側溝にはいる



写真 4 河岸には木工沈床の隙間がたくさんある



写真 8 水を抜いて重機で岩をどかしてハンザギの
救出



写真 9 石の隙間から土砂が抜けないように緑のシートを (2008. 6)



写真 13 山の中からくみ出した水はホタル水路に



写真 10 手前の籠は昔の工事



写真 14 川を右側に付け替えた (2010. 5)



写真 11 石の入った籠の下は“はんざきブロック”



写真 15 左側の旧・河川を干してハンザキの幼生なども救出



写真 12 はんざきブロックの中は多様な空間が



写真 16 左の緑のシート部分は護岸の緑化の試み



写真 17 左岸側の工事は大型はんざきブロック (2010. 7)



写真 21 プールを改造してハンザキの飼育施設に



写真 18 曲がり角は“はんざきブロック”を3段に積む (2010. 7)



写真 22 ハンザキの寝床



写真 19 緑化ブロック (2011. 6)

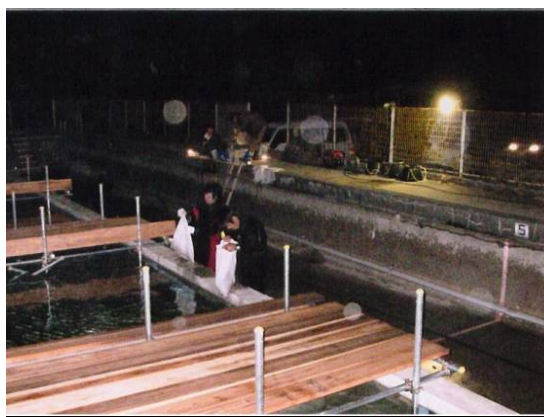


写真 23 深夜に救出したハンザキの搬入



写真 20 旧・生野町立黒川小学校の児童用プール



写真 24 雪の中でハンザキの健康診断



写真 25 養殖場からのアマゴを捕食中



写真 29 衰弱や傷病個体隔離用の生簀



写真 26 プール側面からの景観



写真 30 第一次放流は生野小学校6年生の手で
(2011. 6. 20)



写真 27 アマゴを狙うアオサギ対策ネット



写真 31 飼育プールから取り上げて放流へ



写真 28 オーバーフローを立体的に改造 (ハンザキ
が張り付いて水位が上昇するのを防ぐ)



写真 32 第二次放流は地域の皆さんの手で
(2011. 8. 22)



いよいよ アメリカ オオサンショウウオに会いに!

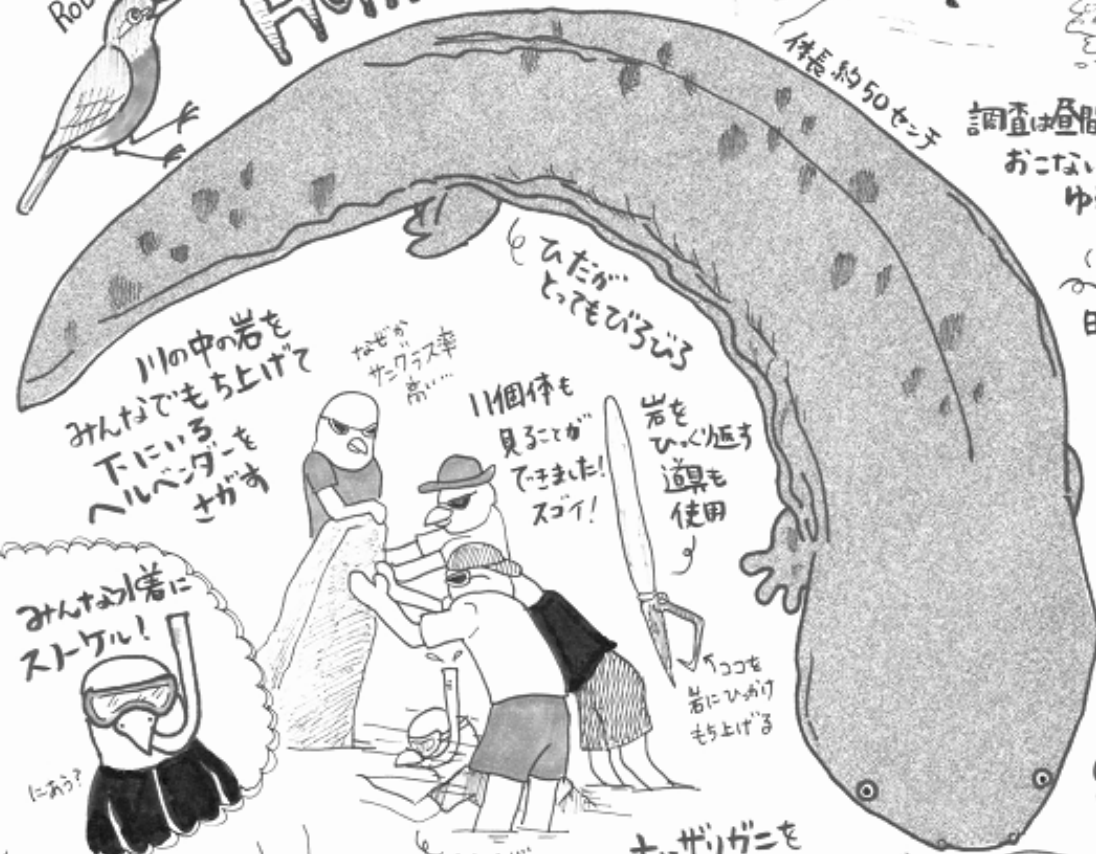


Hellbender



調査は昼間に
おこないます。
ゆるやかな流れの
川です
(Stream 小川だそう
です)

日本のオオサンショウウオ
よりも
へん平で
スマート



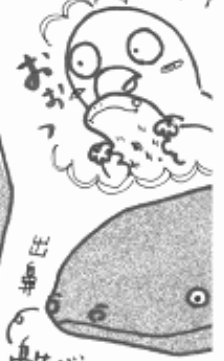
川の中の岩を
みんなでもち上げて
下にいる
ヘルベンダーを
さがす

たせが
サンクス率
高...

1個体も
見ることが
できました!
スゴイ!

岩をひく返す
道具も
使用

↑ココを
岩にひきけり
もち上げる



鼻が
とがっていました...
なぜ?



エリ湖周辺は
Canada Goose
の家がたてこん!



他にも発見した生物いろいろ!

Red Salamander オレンジ色の美しいサンショウウオ



Mudpuppy ヘルペンダーの川にすむ!

American Toad 手のひらサイズの
ヒキガエル

Cottontail 朝寝の周りを
はいまわっていました



アメリカの旅、ヒューにまじりました。
印象的だったのは、出会った人たちの温かさ!
言葉にこぼれていた私に、とても親切に接して下さい。
おかげ様で有意義な旅となりました。お礼申し上げます!

Special Thanks
Greg & Nicoletta
Timさん
Akikoさんとえちね
Hellbender!!!



ヌシから陥落した雄ハンザキ

副理事長 岡田 純

夏の終わりはオオサンショウウオの繁殖期に当たり、オオサンショウウオにとっても我々研究者にとっても特別な季節である。今年もあのヌシは巢穴を持てるだろうか、うまく産卵してくれるか、卵は流されずに孵化までいけるだろうか、などと期待と不安が入り交じった気持ちで調査に臨んでいる。

私は鳥取県日南町日野川でオオサンショウウオの調査を行っているが、その中に集落内を流れる約1kmの調査域がある。ここに3箇所の産卵巢穴

(福田穴、男穴、佐藤穴)が隣接しており、2004年から繁殖調査を行っている。この付近で絶対的な強さを誇っていたのが個体番号182(全長85cm、体重5870g、2005年5月14日計測)のヌシで、2004年に福田穴を占有し(図1、図2)、2005年に福田穴から男穴へ移り、その後も男穴のヌシとして巢穴を占有し、毎年繁殖が確認されていた(図3)。他の巢穴のヌシは流動的であったが、この個体はいつも巢穴にいたのでTV番組にもしばしば登場し、また、豪雨でどんなに増水しても巢穴から逃げないことから「男の中の男」と密かに呼んで特別思い入れのある個体であった。

そんなヌシに陰りが見え始めたのは2009年の

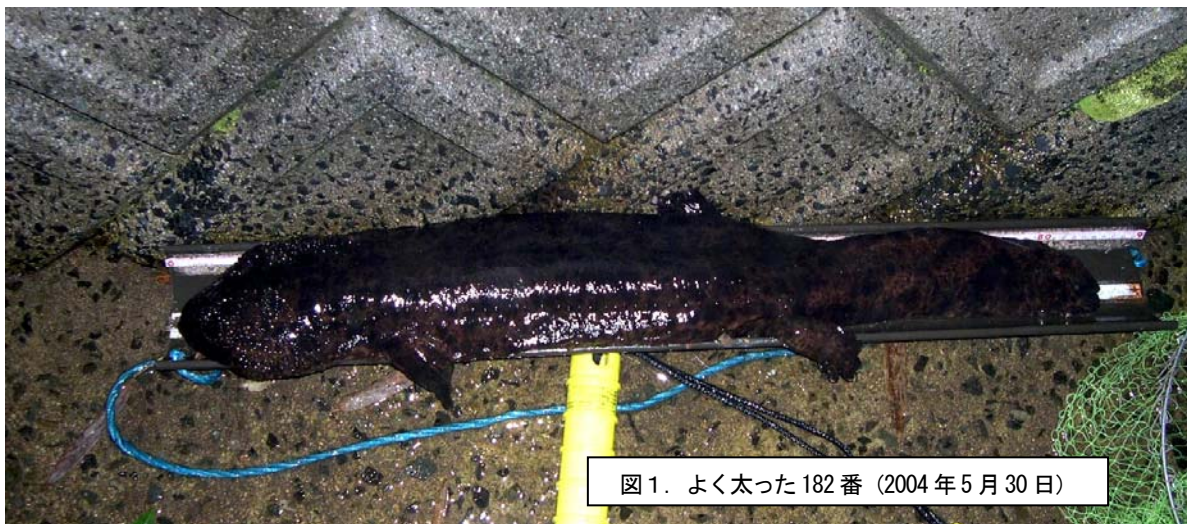


図1. よく太った182番(2004年5月30日)



図2. 福田穴を占有する182番(2004年)

繁殖期で、前肢にかみ傷を受け、一旦、巣穴に集まった個体に巣穴から閉め出されてしまった。しかし、自分より大きな94cmの雄（通称：ブーちゃん）も一蹴し、この年はなんとかヌシとして仕事をやり遂げた。しかし、2010年は繁殖期まで巣穴を占有したものの繁殖後は姿を消し、結局ヌシとして巣穴に残ったのは小ぶりの個体だった。今年2011年、男穴は95cmに成長したブーちゃんに占有されており、182番の元ヌシは巣穴の下流約40m付近できちんと体を隠すこともできず、石の下から体をはみ出しているのが見つかった。かつて男の中の男と呼ばれた182番は、驚いた事にやせ細り、繁殖期なのにクロアカカ周辺の隆起はなく同じ個体と思えないほどであった（図4、全長85.2cm、体重3860g、8月27日計測）。182番のヌシからの陥落は、他の雄とのバトルに敗れたというよりも老齢による体力の衰えから自然になされたよう

に思われた。182番は、どれくらいの期間ヌシとして君臨していたのか定かではないが、このまま流浪の生活を送ることになるのか、またヌシに戻り咲くことはあるのか、追跡調査して行く末を見届けたい。

今回観察されたヌシの変化は、短期間の調査ではなかなか見えて来ない部分である。長命な本種的生活史を明らかにし、よりよい保全を図るためには、本種とじっくりつき合う息の長い調査研究の必要性を強く感じている。

末筆ながら、日野川の調査に協力していただいている福田幸弘、結城悦子の両氏に心より御礼申し上げます。

（ハンザキ道場、鳥取大学大学院）



図3. 男穴を占有する182番 (2009年8月31日)



図4. 痩せてしまった182番 (2011年8月27日)

第5回ヘルベンダー・シンポジウムに参加して

研究員 田口勇輝

2011年6月19日～22日にアメリカのペンシルバニア州でおこなわれた「第5回アメリカオオサンショウウオ・シンポジウム (The 5th Hellbender Symposium)」に参加してきました。日本からは、私と妻の愛子、Timothy Johnson さんの3名が渡米。岡田さんも参加されるご予定でしたが、お子様のご誕生で急きょキャンセルされ、やや心細い心境での参加となりました。

このシンポジウムは、アメリカで2年に1度おこなわれているもので、関係者だけが参加する会議です。関係者とは、主にアメリカオオサンショウウオ (以下、ヘルベンダー) を調査している大学の研究者や、ヘルベンダーを飼育している動物園関係者 (飼育係やキュレーター)、野生生物管理課などでヘルベンダーに関わっている行政の担当者です。これらの関係者がそれぞれ20名ほど、合計で60名ほど (うち半数は女性) が参加していました。また、フリーランスで調査をしている方や、NGOのスタッフの方も少しいらっしゃいました。

さて、シンポジウムの初日は、夕方から集まって、軽いミーティングをおこないスタート。2日目は現地調査、3～4日目は口頭発表という日程でした。これらのスケジュールとは別に、毎晩おそくまで雑談できるスペースが用意されていてアルコール片手にオオサンショウウオ談義に花を咲かせるといった、とても有意義な時間もありました。実際、会議のなかで参加メンバーと話す時間は限られているので、こういう時間はじつに大切です。

2日目の現地調査では、3班に分かれて日中の川を踏査しました。この調査は、日本で一般的におこなわれている夜間に目視で個体を確認するというものではなく、昼間に、1m以上もあるような大きな石を、巨大なフォークのような道具を使いながら (積極的に?) 引っくり返して、石の下に隠れている個体を探すというものです (写真1)。ときには、大の大人が5人がかりで、やっとな石を持

ち上げるという場面もありました。私の班では4時間ほどかけて6～700mほどを踏査し、ヘルベンダー11個体を発見しました。個体識別に使っているPITタグは、日本で主に挿入している左肩の部位ではなく、尾の付根に挿入していました。調査した河川の環境は川幅が10mほどで、瀬淵構造がはっきりせずに平瀬がずっと続き、所々に大きな平たい石があるといった様子です。しかし、他の生息地では、日本の河川上流部のような瀬と淵がはっきりあり、大きな石がゴロゴロしているような環境にも生息しているという話も伺いました。

採捕したヘルベンダーは全長40～50cm級のもののがほとんどでした。ハンザキ研の周辺で見つかる1m級の個体と比べて、少し物足りない感じも…。けれど、それもそのはず、日本のオオサンショウウオは最大で全長150.5cmに達するのに対し、アメリカのヘルベンダーは最大でも全長74cm、ちょうど日本の半分ほどの大きさにしかならないのです。そのため、じつは50cm級の個体でも、日本という1mオーバーの個体といったところになるのでしょうか。また、ヘルベンダーは、オオサンショウウオよりも扁平 (ぺったんこ) で、腹部の左右にあるビラビラがよく発達しているのが特徴的でした (写真2)。



写真1) 調査の様子。道具を使って大きな石をひっくり返してヘルベンダーを探す。



写真2) 計測中のヘルベンダー。左肩に咬まれた痕が残っている。腹側にも同じ痕を確認。ヌシに咬まれたのだろうか!?なお、上のメモリはインチ (1インチ = 2.54 cm)。

3~4 日目の口頭発表では、5 つのセッション（Ⅰ：調査、Ⅱ：健康状態・病気・教育、Ⅲ：回復・飼育・初期対策<Headstarting>、Ⅳ：生態・行動、Ⅴ：遺伝）があり、計 25 題の発表がおこなわれました。各発表では、大学の研究者だけでなく、動物園関係者、行政関係者もガッツリとした調査データとその統計解析に基づく発表がなされていて、そのレベルの高さに驚きです。さらに、発表だけでなく、会場にいるメンバー全員が対等な立場で白熱した質疑応答をおこなっていて、皆さんがもっているヘルベンダーへの関心の高さや議論の上手さがひしひしと伝わってきました。

各発表では、広島市安佐動物公園の人工巣穴をモデルとした巣穴でヘルベンダーの繁殖が成功したことや、日本と同様に弱齢個体が多く見つからない生息地が多いなか比較的良好に見つかる場所もあること、雄より雌のほうが大きな個体が多いこと（日本では逆の傾向がありますが）、カエルツボカビやラナウィルスに感染している個体がいること、何らかの原因で四肢が損失している個体が野外で発見されていること、幼生の胃内容物がカゲロウ・トビケラ・ザリガニ・カワゲラの順に多かったこと、多数の調査者が協力して広範囲にわたる地域で詳細な生息調査を進めていることなどが印象的でした。

私自身も、“Seasonal movement of the Japanese giant salamander (オオサンショウウオの季節的な移動)”という演題で発表してきました(写真3)。英語での研究発表は初めてでしたが、練習の甲斐もあり上手く発表できたと思います。それも、同行した Timothy Johnson さんや、アメリカでとてもお世話になった Gregory Lipps さん(写真4)が事前に発表資料をチェックしてくださったり、前夜には発表練習にも付き合ってくださったためでしょう。お二人には本当にたくさんのご助力をいただきました。ありがとうございました！

ところで、日本でも毎年、「日本オオサンショウウオの会」が開催されています。こちらは毎年おこなわれており、参加者は、任意団体でオオサン

ショウウオを調査している方、動物園関係、大学関係、調査会社関係、開催地の行政関係者が少しといった感じでしょうか。日本の会では、市民が集まって草の根的に情報交換をおこなう場、アメリカの会では、実際に権限をもっている専門家が多く集まって具体的な保全を考える場というような違いがあるように見受けられました。特に後者では、生物を専攻してきた行政関係者や動物園関係者が保全を推し進める鍵になっているように感じます。

アメリカでは、ゲームハンティングの歴史があるため、それを調整するための野生生物管理(Wildlife Management)などが、行政者として実行力をもってきました。そのような歴史をもたない日本では、特別天然記念物のオオサンショウウオを、文化庁、具体的には地域の教育委員会が管轄します。しかし、主に埋蔵文化財などを扱って生物を専攻されていない担当者も多いため、効果的なオオサンショウウオの管理体制が求められています。

最後に、今回のアメリカ行きでは、私より少し年上のグレッグこと Gregory さんと大変親しくなり(誕生日も同じ!)、たくさん情報交換や相談、議論などもできたことが、自分にとって一番の収穫でした。これから、彼とタッグを組み、様々なことをおこなってきたいと思います。



写真3) 研究発表の様子。



写真4) アメリカでとてもお世話になったグレッグ夫妻のご自宅にて、なぜか日本オオサンショウウオの会 鳥取大会のノボリをもっていた(笑)



『中国両生動物彩色図鑑』、「大鯢」の和訳

研究員 増子 善昭

今回、中国の図鑑の内、オオサンショウウオに関する項目の箇所を訳すように仰せつかりました。それは、『中国両生動物彩色図鑑』（費梁/葉昌媛編著 四川科学技術出版社 2010年）中の「大鯢」



の説明文で、凡その意味は何となく解るのですが、詰めて読んでみるとよく分かりません。そこで、中国の友人に頼んで訳して貰い、それを日本語的に直すという方法を採用しました。高校の化学の先生をしながら日本語を勉強した人でも、分野が異なると中国語自体の理解が難しかったようです。

中国ではオオサンショウウオの養殖が盛んなようですが、養殖をしたもの（2世）については食することができるとのこと。現に、インターネットで検索してみると、スッポンを食べさせる店で滋養にいいとのことメニューにも出ているところもあるようです。高級食材のようです。

ついでで申し訳ないですが、食に関してちょっと変わった実体験談をさせて頂くと、私も中国駐在中には、蛇（の身、肝、血）、カエルは何度出てきたことか解らないくらいでした。豚足、ニワトリの足、などの一般的な物から、少し変わった物と言えばサソリの炒った物、蟻（大きさが1cm程度の割合大きな黒蟻）入りのココナッツスープ（こ

の時は知らなかったので、小姐（シャオジエ=店ではウェイトレス）を呼んで「蟻が入っている！」と文句を言いました。しかし、名物スープだと説明を聞いて、スプーンですくってみると黒蟻がどっさり！！）。また別の宴席で前菜を食べ終え、ある程度の料理が出た後でテーブルの上がきれいに片付けられて出てきたメインディッシュが何と羽根のない蟬1匹が各人に一皿。さすがに同席していた女性は二人とも手を付けませんでした。ザリガニはあまりにポピュラーで変わった物とは言えません。一人で10匹や20匹くらいペロッと食べます。見ても食べてももう一つピンと来なかったのが、“夏季は草（の根っこ？）で冬季は虫”とかいう得体の知れない物のスープ（冬虫夏草を用いた虫草鴨子と呼ばれるスープで滋養にいいと言われて薦められたけど・・・）。中国女性はスッポンとか豚足、鶏の足にはゼラチン？（コラーゲン？）質なので肌に良いとか言ってよく食べます。男性はゲテモノを食べられないと男ではないとでも言いたげで、得意顔でそれらを食べるし同席者に無理強いする傾向があります。（ゲテモノ類全般が苦手な身としては実は思い出すのもゾーとします。）鳩の丸焼き（もちろんお頭付きで皿に盛られてきます）や子豚の丸焼き（勿論これもお頭付き。皮是北京ダックのように焼いて餃子の皮のような物にネギのような物とタレとを合わせて食べます）は割合気を張った席に出てきますからそれなり。これらの経験は食材の多い中国ではまだまだほんの一部でしょう。何せ、広州では飛ぶ物では飛行機以外、四つ足では机以外は何でも食べるとかって言いますから・・・。興味のある方は中国で食べ歩きなどされたら如何でしょうか？

ではでは、本番は下記です。

<チュウゴクオオサンショウウオ>

Andrias davidianus (Blanchard, 1871)

英文名 Chinese Giant Salamander

形態の特徴

このサンショウウオの体型は大きくて、普通の全長は1m程度で、大きいのは2m以上に達すること

があり、尾の長さは頭の長さの 52～57%です。体重は数十kgに達することがあります。頭は広くて平らで、頭の長さは頭の幅より少し大きい。外鼻孔は小さくて、ほぼ口の両端に位置します。;目はとても小さくて、まぶたがなく、目の間隔は離れています;口は大きくて、唇のしわははっきりしています。ひよめき(訳者注:泉門=頭蓋骨縫合前の柔らかい部分)はない。骨の歯は長くて、上顎の歯と平行して並んでおり、左右の2列はほとんど相連なります。胴体は丈夫で平ら。尾が高く、基部は広くて厚い。後ろへ次第に側扁になり、尾鰭(おびれ)の皺が高く、分厚い。尾の末端は鈍くて丸いものや、あるいは鈍くて尖っています。皮膚は比較的つつつして、頭部の背面にも、腹にも、対になっている疣(いぼ)の粒があります;体の側面には厚い皮膚の皺(しわ)と疣(いぼ)の粒があり、あばらの溝は12～15本であり、或いははっきりしていない。四肢は太くて短く、その後の縁には皮膚のしわがあります;前、後で身体の向かい合う時、前足指と後足の指の間隔は約6本のあばらの溝の間です。手のひら、足裏部には黒い角質層はない。前足には4つの指があり、後足には5つの指があります。前足の指と後足の指に縁膜があり、その基部には水かきの跡も残っています。体の背面には浅い褐色で、暗褐色或いは浅くて黒い褐色等、黒い或いはとび色の斑があるものもいるし或いは斑が無いものもいます。腹の側は灰色の茶褐色。雄サンショウウオの肛門は隆起しており、肛門の孔は縦長で、内壁には小さい乳突があります。卵の粒は丸く、卵の直径は5～8mmで、乳黄色です。孵化して母体を離れたばかりの幼体の全長は28～32mmで、全長が170～220mmまでの時に外鰓は消えてなくなります。

生物学の資料

このサンショウウオは、普通には海拔の100～1200m(最高は4200mに達する)の山岳地帯の水流の比較的ゆるやかな河川、大型の谷川を流す洞穴あるいは深い淵中で生活しています。サンショウウオの多くは単独で生息しており、母体を離

れたばかりの幼体は石の浜の内で群をなします。昼間にはあまり動かず、たまに岸に上ってひなたぼっこをし、夜間の活動は頻繁です。主にカニ、魚、カエル、エビ、水蛇、水生の昆虫を食にします。7～9月には、繁殖の盛期で、雌サンショウウオは帯状に産卵して、数珠状を呈し、数十メートルにもなる。普通の産卵は300～1500粒です。人工養殖では、ドジョウ、魚等の小さい動物をえさとしてやることができます。全長は40cmになればすでに性的に熟成しています。飼育条件下で55年生存することができます。

群の状態

中国特有の種です。このサンショウウオ分布は広くて、数量は多くて、経済価値が高い(訳者注:滋養の食用に饗せられるため)ことと生態環境の悪化などが原因で、野生の群の数量はとても少ない。保護のランク:国際CITES付録I、中国II級です。脇等級(訳者注:絶滅危機に瀕した等級)を受けています:きわめて危険CR(訳者注:絶滅危惧A類(CR))。国内はすでに多数の養殖場を創出して、人工飼育の数はとても多い。

分布

河北(?),河南、山西(垣曲、陽城)、陝西、甘肅、青海(曲麻萊)、四川、重慶、雲南(奕良、永善)、貴州、湖北、湖南、江西(井岡山、靖安)、江蘇(蘇州、徐州?)、上海(?),浙江、福建(厦門?)、広東(広州、北部)、広西。

訳者後記:下線部については、中国の友人と相談しても意味が分かりませんでした。お解りになる方がおられましたら、お教えてください。



日本産と中国産のハイブリッド



大鲵属 *Andrias*

隐鳃鲵科 *Cryptobranchidae* Fitzinger, 1826

大鲵属 *Andrias* Tschudi, 1837

27 大鲵 *Andrias davidianus* (Blanchard, 1871)

英文名 Chinese Giant Salamander

形态特征 该鲵体型大，一般全长1m左右，大者可达2m以上。尾长约为头体长的52~57%；体重可达数十千克。头体扁平，头长略大于头宽；外鼻孔小，近吻端；眼很小，无眼睑；眼间距宽；口大，唇褶清晰；无幽门，犁骨齿列长，与上颌齿平行排列，左右两列几乎相连。躯干粗壮扁平。尾高基部宽厚，向后逐渐侧扁，尾鳍褶高而厚实，尾末端钝圆或钝尖。皮肤较光滑，头部背、腹面均有成对的疣粒；体侧有厚的皮肤褶和疣粒，肋沟12~15条或不明显。四肢粗短，其后缘均有皮肤褶；前、后肢贴体相对时，指、趾端相距约6条肋沟之间距；掌、趾部无黑色角质层；前足4个指，后足5个趾，指、趾有缘膜，其基部具蹼迹。体背面浅褐色、棕黑色或浅黑褐色等，有黑色或褐黑色斑或无斑；腹面灰棕色。雄鲵肛部隆起，肛孔纵长，内壁有小孔突。卵粒圆，卵径5~8mm，乳黄色。刚孵出的幼体全长28~32mm，全长170~220mm时外鳃消失。

生物学资料 该鲵一般生活于海拔100~1200m(最高达



大鲵 (四川洪雅,李健)

4200m)的山区水流较为平缓的河流、大型流溪的岩洞或深潭中。成鲵多营单栖生活，幼体喜集群于石滩内。白天很少活动，偶尔上岸晒太阳，夜间活动频繁。主要以蟹、鱼、蛙、虾、水蛇、水生昆虫为食。7~9月为繁殖盛期，雌鲵产卵带1对，呈念珠状，长达数十米；一般产卵300~1500粒。人工饲养可投喂泥鳅、鱼等小动物。全长40cm已达性成熟，饲养条件下可存活55年。

种群状态 中国特有种。该鲵分布广，数量多，由于经济价值大和环境质量下降等原因，野外种群数量很少。保护级别：国际CITES附录I，中国II级。受胁等级：极危CR。国内已建立多个养殖场，工人饲养种群数量很多。

分布 河北(?)、河南、山西(垣曲、阳城)、陕西、甘肃、青海(曲麻莱)、四川、重庆、云南(奕良、永善)、贵州、湖北、湖南、江西(井冈山、靖安)、江苏(苏州、徐州?)、上海(?)、浙江、福建(厦门?)、广东(广州、北部)、广西。



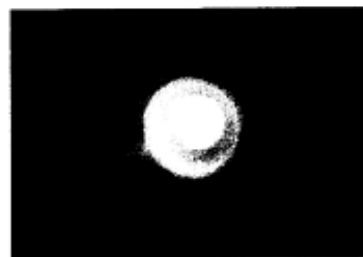
大鲵 (幼体,陕西宁强,江建平)



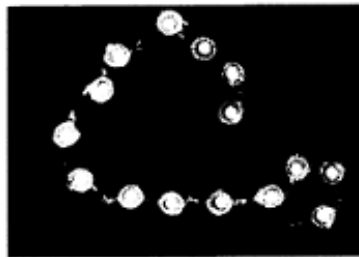
大鲵 (雄,四川洪雅,袁梁)



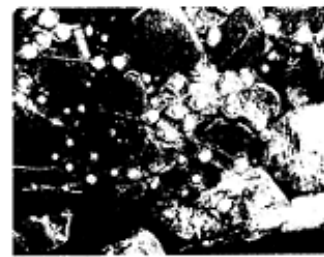
大鲵 (雄,陕西汉中,曹梁)



大鲵 (卵粒,湖南桑植,刘运清)



大鲵 (种群呈念珠状,湖南桑植,刘运清)



大鲵 (产卵场和卵群,湖南桑植,刘运清)

「カエルに思う」

理事 鞍田悦子

この夏の盆休み、生野町黒川に家族が集まった時、白いプラスチック製のいすの背に、何かが留まっているのに気がきました。一瞬、前日近くの藪の中を飛んでいたムシクイの幼鳥かと緊張し目を凝らすと、それはカエルでした。細く長い四肢の指でしっかりつかまり、尖った顔の黒い過眼線やゴールドのアイシャドウの横顔から小鳥と見間違えました。触っても動かず、よく見ると美しい光沢のあるつるつとした赤褐色の背で、後足はまるで太い模様の網タイツをはいたようです。5cmほどで、顎からのど、腹にかけて一面黒い斑紋があるので、春に山側から聞こえていたグウ、グウとくぐもった低い声の主のタゴガエルかなと思いました。2日ほど居ましたが、直径数mm、長さ3cmほどのウンコを残して消えてしまいました。

黒川に来るようになってから、カエルが再び身



タゴガエル？

近な生物になりました。16年前小屋を建て始めた頃、主人の手のひらほどのウシガエル(食用ガエル)が死んでいました。大きな鼓膜がある雄でした。でも今は、夜にあの大きなボウ、ボウと鳴く声を聞かないように思います。声といえば、

「月夜の田圃でコロロコロロ、コロロコロロ鳴く声は、あれはねあれはね、あれはカエルの銀の鈴……」

と童謡に歌われたのは、町の郊外の田圃でにぎやかに高く低く鳴く、ゲロゲロやグワグワのアマガエルやトノサマガエルではなく、山里のシュレー

ゲルアオガエルだったのですね。黒川の水田の畦に白い泡状の卵塊を毎年見かけます。

林道入り口近く雪解けの後できた水溜りに、長さ数mある透明なホース状の卵塊を見つけたのは10年も前です。小さい黒いオタマジヤクシが出てきたので、孫が数匹持ち帰り幼稚園で育てました。元気に幼体になったのですが、あまりにもちっぽけて親のヒキガエルに似ない痩せ蛙なので、水溜り近くの落ち葉の中に返してやりました。その頃は、雨模様の夜、黒川で車を走らせると轆かれたヒキガエルをよく見かけました。春には、我が家の土手下の同じ場所に開いた大き目の穴の前に、毎年20cmほどの踏み固められた台座ができていました。その事を知らない娘が、信楽焼きの蛙がおいてあると思い手を伸ばして、それが動いたので悲鳴を上げたこともありました。

ある年、その水溜りの卵塊はずたずたに切られていました。また、村の人にとって林道の水溜りはトラックが通るのに具合が悪いのでしょう、淵を切って水を抜いているのを見かけました。去年も今年も卵はありませんでした。のっしのっし道を歩くヒキガエルの成体は背中はいぼから毒のある粘液を分泌するようですが、車をやっつけることはできません。卵の間に食べる動物がでてきたのかもしれない。我が家の生きた信楽焼きも姿を消してしまいました。

栃本先生はじめ有志の方たちのおかげで市川のアンコウは姿を消すことなく命をつないでいます。アンコウと同じ両生類のカエルは減少が著しく、カエルツボカビ症や環境変化への対応が困難でこのまま減少が続くと絶滅するとも言われています。もちろんカエルだけではなく、人類出現以来、地球上から姿を消してしまった数え切れない生物を思い、せめて、今共存する命あるものがこれ以上減少することが無いようにしたいものです。



日本ハンザキ研究所のIT事情 (3)

理事 黒田 哲郎

『あんこう』の先号にて、見切り発車的に「当研究所でも携帯電話が通じるようになり(ソフトバンク携帯のみ。2011年4月現在)」と書いたが、実は今現在(9月27日)、まだ通話することが出来ない。

雪が無くなったら工事し、その後すぐに使えるようになるとのことであったと思う。現に3月3日、雪の降る中でアンテナ柱設置工事が行われ、4月に機材を取り付ければすぐにでも供用開始がなされるようなことを工事業者の方は言っていたと思う。

しかしアンテナ柱は立ったものの、いつになっても機械の取り付けがなされず、春が来て夏になった頃、アンテナ柱を立てた位置では、木の葉が邪魔で衛星からの電波が受信できないので、アンテナ柱を移したいとのことであった。アンテナ柱を設置したのは真冬で木は丸裸だったため、葉が生い茂る夏の姿が想像出来なかったのだろう。

アンテナ柱の設置・移設を見ていると、その都度10人近くの人間と大きな機械が来て、手間も費用も大変そうな事が見て取れる。夏が来れば南西方向にある木の枝が繁茂することくらい、想像がつきそうなものだが…。

それ以降も機械の設置・調整等に手間取っているようで、パラボラアンテナ、電気ケーブルの取り付けが終わったように見えてから一ヶ月以上経った今でも供用が開始されていない。

そうかと思えば黒川本村では、年度末という予定よりはだいぶ遅れたものの、7月頃には特に通知もなく、ソフトバンクの携帯電話が使えるようになっていた。それどころか、黒川本村にはなぜか同じアンテナが2本建っている。地区の両端ならともかく、200mしか離れていないところに2本も。いつの間にかAUのアンテナでも建ったのかと思いきや、そうではなくソフトバンクなのだという。

ソフトバンクのアンテナは、確かにNTT docomoのものに比べて規模が小さく、出力も小さいのかもしれないが、位置的には明らかに1本は不要だし、どうせ設置するなら別の地区に建てていただきたいものだ。

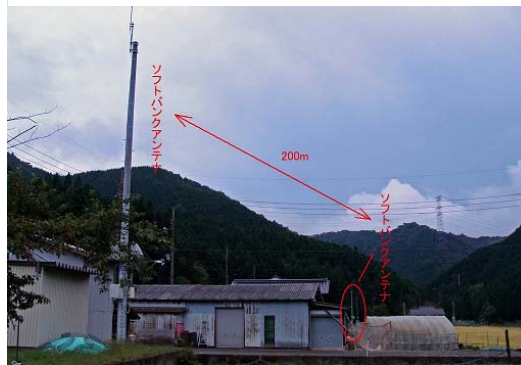
まあ、ソフトバンク内部の事情までは分からないのであるが、会社としてはこれでよいのであろう。これまでは固定電話しか使えず、今の時代としては不便であったが、これで当研究所来訪者の利便性が向上するので、我々としても嬉しいことである。

さて、後は携帯嫌いの栃本所長に携帯を持っていただくか、それならば機種は個人的に興味のあるiPhone5(今秋発売予定)を使ってもらいたい、などと想像を膨らませている。

そして残る願いは、当研究所周辺にNTT docomoのアンテナが建つこと、光ファイバーケーブルが敷設されることの二つである。児童、生徒の環境学習にも使われ、比較的入り込み客数の多い当研究所であり、いざという時のことを考えると一つでも多くの通信手段を確保しておきたい。何とかありませんか、NTT docomoさん。



猛暑の中、アンテナ柱を移設(アンテナ柱の南西には葉が茂っている)



黒川本村に建つソフトバンクの2本のアンテナ



雑言・提言・独言

食と命を考える

会員 田淵 光

人間は本来、自分の体のバランスを整えてくれる食物を自然に求め、食するものを美味しいと感じる能力を持つとされています。体がその時々状態に応じ、必要とされる味の食べ物を求めるのですが、体からの欲求の訴えを無視して、同じ物（健康食やダイエット食など）を長期に渡って摂取すると、身体だけでなく精神にもストレスがかかり、その結果として、消化力の低下ひいては体力の低下をきたし、疲れやすくなり身体衰弱状態に陥ると考えられます。

さて、肉好きの皆さん、今まで、そしてこれからも食べ続けるであろう精肉 1kg を産出するために必要な飼料（そのほとんどが輸入穀物なので）はいったい何 kg だと思いますか。答は、トリ（チキン）で 2~3kg、ブタ（ポーク）で 4~5kg、ウシ（ビーフ）で 7~8kg です。それでは、それぞれの家畜が店頭で並ぶ精肉になるまでの期間とどれぐらいだと思いますか。答は、トリ（ブロイラー）で 2ヶ月、ブタ（ポーク）で 6ヶ月、ウシ（ビーフ）で 22~30ヶ月以上です。

元々の野生種ではほとんど採食しない穀類を“ヒトのエゴ”で、食べさせなれて病と戦い、生きたあかしとして精肉が残るのです。人間の食欲のために家畜化され、繰り返し遺伝的改良を加えて、ヒトが美味しいと思う上質な肉となって並んでいます。本来の一生命体の寿命とは無関係に、採食しないほうが好ましい飼料を食べさせられ、メタボ化され、病と戦いながら生き、ヒトのエゴ・欲によって突然に生涯を終わらされるのです。ヒトの手による屠殺によりその命の終焉を迎えるのです。そして、解体処理され皆さんの口に入る肉となって店頭で並んでいるのです。

現在の日本は、多くの比率を食料輸入に頼っているにも拘わらず、飽食や残食が目立っています。ところが、地球上の多くの国では何億人もの人々が飢我に苦しんでいるのです。

動物のベビーチャイルド期はかわいく愛らしく、ヒトの心を癒してくれますが、家畜の子供達は自らの命の短さなど知る由もないのです。まして、ヒトの食料となるために生まれてきたなど・・・。

生命とは、本来生きるためにこの世に現れます。でも自らの生きたい意思とは関係なく（自然捕食は別にして）突然に命の終焉を迎えるのが、家畜です。飼育、肥育期間に無駄とも思える膨大な穀類をヒトのエゴのために無理やり食べさせられ（無駄な消費？）そして多くのヒトの手を経て食卓に上る肉になっていること、皆さんに知っていただきたいのです。

全ての動植物は地球上で自然界の過酷な状況下で確実に自らの“種”を後世に残すために、夫々の生き方を勝ち取ってきたのです。オオサンショウウオにしても同様に何億年も生き続けています。過酷な気候条件、食物連鎖による自然捕食と戦い、何時命の終わりを迎えるかわからない運命的な生き方をしているのです。

最後に肉の話に戻りますが、畜産農家の人々は我が子に近い愛情を注いでそれぞれの家畜を飼養しています。そして生産農家の手を離れてからも多くの人達の手にかかり、店頭で並んでいる（肉だけでなく全ての流通品）のです。そう考えると、家畜だけでなく多くの人々に感謝の念をもって無駄なくそして捨てることなく完食することが如何に大切なことか再認識できるのではないかと思います。地球上に同じ命を授かりながら、人間の為に生きる生物達もいることを少し考えてみていいのではないのでしょうか。 (獣医師)

<参考用語>

家畜（かちく） domestic animal、live stock

「人間の生活に利用する目的で、野生動物から遺伝的に改良した動物をいう。利用の目的によって農用動物 farm animal、愛玩（あいがん）動物 pet animal、実験動物 laboratory animal の3種に大別することができる。また、広義の家畜はこの3種を含むが、狭義には農業生産に直接かかわっている農用動物のみを意味することもある。農用動物には乳、肉、卵、毛、皮革、羽毛などの畜産物を生産する用畜と、労働力を提供する役畜とに大別される。」[日本大百科全書（小学館）]

[執筆：正田陽一・西田恂子]

yahoo 百科事典より



見世物としてのオオサンショウウオ

研究員 池上 優一

はじめに

我が国の動物古記録に関する興味深い論文として『珍獣異獣奇魚の古記録』(磯野秀直, 慶応義塾大学日吉紀要・自然科学, 2005)がある。この中には、古代から近世までの実に様々な鳥獣魚類等の記録が示されており、世界最大の両生類オオサンショウウオも取上げられている。

それらには、古の飛鳥、奈良、平安の頃の古記録から始まり、中世には記録が途絶えるが、江戸時代になると再び多くの記録が残されている。これらの引用文献と具体的な説明を見ると、江戸時代にはオオサンショウウオは“見世物”にされた事が多かったようである。今回は、このオオサンショウウオの見世物について探ってみる。

1、記録の概要

まず、『珍獣異獣奇魚の古記録』から、オオサンショウウオに関する記録を抽出する。

- ① 推古27年(619)4月4日 オオサンショウウオ? 「近江国蒲生川で、人のような形のもので得る。」(日本書紀)
- ② 推古27年(619)7月 オオサンショウウオ? 「摂津国の堀江で、赤子のようで、魚でもなく人でもないものを網で得る。」(日本書紀)
- ③ 延暦16年(797)8月16日 オオサンショウウオ 「平安京の宮殿の側溝で魚を得る。長一尺六寸で、形は常の魚と異なる。ある人は椒魚という。」(日本紀略)
- ④ 仁寿2年(852)3月7日 オオサンショウウオ 「近江国で奇魚を得る。古老はみな椒魚という。」(文徳実録)
- ⑤ 天和3年(1683) オオサンショウウオ 「天和年間(1681年~本年)、武州の牛込高田川で捕獲する。長3尺。」(日東魚譜)
- ⑥ 享和1年(1801)6月12日 オオサンショウウオ 「江戸板橋水車の堰下で捕獲。長4尺1寸。同15日将軍家斉が上覧。ついで見世物となる。」(本朝諸国風土記3)
- ⑦ 文政2年(1819)10月15日 オオサンショウ

ウオ 「尾張国の御伊勢川(笈瀬川)で捕獲、翌月名古屋広小路で見世物に出る。長2尺7寸。」(猿猴庵文政日記)

- ⑧ 文政9年(1826)2月19日 オオサンショウウオ 「江戸へ向かうシーボルトが鈴鹿山中産の生きた個体を門人湊長安から受け取る。」(江戸参府紀行)
- ⑨ 文政11年(1828)6月10日 オオサンショウウオ 「名古屋柳葉師で、この日より見世物。」(見世物雑誌)
- ⑩ 天保3年(1832)8月20日 オオサンショウウオ 「京都二条城の堀で捕える。長3尺5寸。」(本草図説4)
- ⑪ 天保4年(1833)11月 オオサンショウウオ 「名古屋大須で見世物。長3尺5~6寸。」(見世物雑誌)
- ⑫ 天保12年(1841)春 オオサンショウウオ 「江戸城の堀浚いで竜ノ口より捕獲。作業終了後に堀へ戻す。長3尺。」(皇代系譜)
- ⑬ 嘉永6年(1853)5月 オオサンショウウオ 「江戸で生品を見世物とする。」(藤岡屋日記)
- ⑭ 慶応1年(1865)1月18日 オオサンショウウオ 「江戸浅草奥山の見世物に出る。」(遊覧記)

以上14例の記録が紹介されている。

最初の4件が古代で、中世は無く、残りが江戸時代の文化の充実期から江戸後期の記録が最も多く、このうち6件が見世物としての記録である。

2、記録の詳細

(1) 具体的な記載内容

最初の①及び②は、奈良時代の養老4年(720)に舎人(とねり)親王らによって30巻として編纂された歴史書『日本書紀』の中の記載である。この中で、聖徳太子とともに多くの改革を試みた第33代の推古朝の時代、推古27年(619)の記録として残っている。原文は「二十七年夏四月己亥朔壬寅近江国言於蒲生河有物其形如人秋七月撰津国有漁父沈罟於堀江有物入罟其形如児非魚非人不知所名」となっている。

この中の、蒲生河は、現在の滋賀県佐久良川であり、「罟」は網のことである。この文については、『日本博物学史』（上野益三，平凡社，補訂版-1986）では、「ハンザキか？」と疑問符をつけ、本文内でも「オオサンショウウオ？」と疑問符をつけているように、これだけの記載だけでは言い切れないことを示している。

③は、平安後期の歴史書『日本紀略』であり、神代から後一条天皇までの歴史を漢文の編年体で記したもので、問題の個所は、延暦16年(797)8月の「延暦十六年八月己巳掖庭溝中獲魚長尺六寸形異常魚或云椒魚在深山澤中」という記録である。

④は、平安前期の歴史書『文徳実録（日本文徳天皇実録）』であり、問題の個所は、「仁寿二年三月癸酉近江国得魚形似獼猴異而戲之故老皆云此椒魚也昔時見有此物」である。

この③、④いずれも「椒魚（波之加美伊乎はしかみいを）」と称しており、当時の椒魚は、現代のオオサンショウウオとして間違いと私は思っている。

ここから、時代は中世を飛ばして江戸時代に入る。

⑤は、江戸期の医者であった神田玄泉著による『日東魚譜』で、我が国で最初の魚介のみの魚譜といわれる。この中で、問題の記録は、江戸時代になって80年ほど経過した、天和三年(1683)の記録である。この中で説明文に「鯢魚拾遺」とあり、過去の中国の亡失書である『本草拾遺』（陳蔵器）から引用した鯢魚の解説の後、「天和年中於武州牛込高田川俚民為奇物競集殺之大三尺余形状手足如郭璞所設也撰州多有之魚商飼之鬻于市未聞有八九尺者也」と続く。これを少し分かり易く言いなおすと、「天和年間に武蔵国の牛込の高田川で、地元の人たちが三尺の奇異な魚を見つけ、人々が競って集まってこれを殺してしまった。形や手足は郭璞（かくはく—『山海経』の後世解説者）の説明のとおりであった。撰津国では多産しており魚商がこれを

飼っておいて市で売る。・・・」となる。

⑦～⑭のうち、⑧のシーボルトが入手した記録、⑫の江戸城の堀堀えで発見した記録を除き、残りは全て見世物に関する記録であり、これらについては後述したいと思う。

(2) その他の記録

『日本ハンザキ収覧』（生駒義博編，津山科学教育博物館発行，1973）の中に、岩間春夫の『大山椒魚の研究史』が掲載されているが、『日本書紀』の第16代の仁徳天皇時代、仁徳67年(379)の岡山県の高梁川の記録を最古のものとして挙げている。しかし、『日本書紀—全現代語訳』（宇治谷孟，講談社学術文庫，2011）を見ると、原文「吉備中国川嶋河派有大蛟令苦人・・・」に対して、「吉備の中国（なかつくに）の川股に、竜がいて人を苦しめた・・・」と現代用語で説明してあるが、この竜を、岩間氏はオオサンショウウオと見做したのであろうか。

3、見世物について

(1) 江戸の見世物

仏教寺院で本尊をはじめとする仏像について、その像を安置するお堂や厨子の扉を開いて拝観できるようにすることを御開帳といい、古くは平安時代から行われていたらしい。その時期は、縁日など毎年特定の日に開帳する寺院もあれば、数年から数十年に一度特定の日にしか開帳しない寺院もあり、開帳の間隔は寺院によって様々であったという。そして、仏像がある寺院で行う開帳を「居開帳」（いがいちょう）、その寺院以外の場所に出張して行う開帳を「出開帳」（でかいちょう）と称された。

江戸時代になると、この開帳は興業的になり、さまざまな作り物を飾り、幟を立て、また境内には露店、見世物がならび、きわめて賑やかになっていったらしい。本来的な聖なる目的から離脱して庶民の興味をそそり金儲けの手段に利用する形態に変化していった「開帳」には、役人や商人、さらには寺社等の利害も係わっていきたく、そのような状況に対して批判的な見方もあったよう

である。

そして、見世物単独で行われるケースも多くなり、神社境内に仮小屋を建てての見世物興行も盛んになっていた。見世物以外では、芝居や浄瑠璃などもあったが、比較的 low 料金で入ることができ、集客力のある見世物が多かったようである。

例えば、『近世地方芸能興行の研究』（竹下喜久男、清文堂、1997）によると、美作津山藩の城下と周辺地の芸能興行が、宝永2年（1705）から慶応3年（1867）までに、約120回行われており、場所は寺社境内が多く、種目は見世物（他に芝居類、技芸等がある）が最も多くなっている。具体的な例をあげると、美作津山藩の『国元日記』（津山市郷土博物館）の安永2年（1774）3月3日及び3月23日の日記に次のような記載があり、役人の係わりや手続き等が伺われて面白いので引用する。それは、「3月3日 晴 井口村 長法寺境内見世物 今日より相始 御徒目付 下目付 差出之、・・・3月23日 曇 長法寺境内見世物 中日之 御徒目付 下目付 差出候處 昨日限 無滞 相済候段 相届之」のような内容であるが、見世物の中身が分からないのは残念である。

なお、当時の見世物の具体的な内容は、『江戸の見世物』（川添 裕、岩波新書、2011）等を参照いただきたい。これら見世物の中には比率は少ないが、結構人気を集めた動物類（輸入動物の駱駝、象、虎など）があり、奇魚として見世物にされていたオオサンショウウオも含まれていた。

(2) オオサンショウウオの見世物

前出文献のうち、まず⑦、⑨、⑪であるが、いずれも尾張藩名古屋での見世物の記録である。これらは、尾張名古屋の小寺玉晁が文政元年（1818）から天保13年（1842）の25年間について、名古屋におけるあらゆる種類の寄席・見世物の興行についての大記録であり、全5巻の『見世物雑誌』

（小寺玉晁 郡司正勝・関山和夫編、三一書房、1991）としてまとめられている。この中に、オオサンショウウオについての絵図付の記録があるので引用する。

⑦は、文政二年（1819）11月の記録である。引用文献は、尾張藩士・高力種信（猿猴庵）の『猿猴庵日記』となっているが、同様の記録が『見世物雑誌』に出ている。



「11月はじめより、

貝龍ともいうオオサンショウウオ

広小路において、貝龍という物を見ず。是先月15日、御伊勢川にて、御園下行当り西側組（御手先組なり）小林喜平という者、つきあみにて是を取予水谷氏に聞きしに、サンショウ魚なりといえり。（椒樹—サンショウの樹に登る物也。）と説明がある。ここで、いきなり貝龍と出るが、地方名については別の機会に触れたいと思う。

その後上図と解説があり、「色紫色なり 長さ2尺7、8寸もこれあり 作州の方言にハンザキという 箱根のは小さきものなり 越後にてはセングワン魚という」と述べている。これは、江戸期本草学の書籍の引用と思われるが、この図はオオサンショウウオの特徴と少し異なり、現地で見たままを模写したとは思えない。前肢の指の数、頭の長さが異様であり、想像するに、見世物見学の後に本草学の書籍（日東魚譜等?）を参考に思い出し書きをしたのではないかと推察される。

⑨は、文政11年（1828）「6月10日より、同所

（例年の通り柳薬師夜開帳）にて、北海にて取り候由にて、大なるさんしょ魚を見ず。」とある。記載はこれだけであるが、



北海で取れたという大なるオオサンショウウオ

大なるという説明と次の図から推察してオオサン

ショウウオに間違いないと思われる。但し、北海で取れたと言う点は、この見世物を行う者が回りまわったオオサンショウウオを北の方で手に入れたということなのであろうか。また、図では前肢の指数に疑問が残る。

⑩は、天保4年(1833)「11月、大須山門において、阿迦魚と名付、見する。先年より追々所々にて見せし、サンショ魚なるべし。」とあり、解説に「長さ3尺5、6寸、桶に水を入れ、其中に居す」とあり、上の図である。お世辞にも上手い図とは思えないが、雰囲気は感じられる。



桶ニ水ヲ入れ、
其中ニ居す。

阿迦魚と称された
オオサンショウウオ

長サ三尺五六寸、

ここで、前出の名古屋の地名等であるが、御伊勢川は筈瀬川であり、現在の名古屋駅西口からの通りの一つで、筈瀬通りとなっているとのことである。柳薬師は、柳の木造りの薬師如来で有名で大変賑わった所らしい。大須は名古屋開府による名古屋城の城下町の整備に伴い、もともと岐阜県羽島市にあった大須観音が徳川氏の命により名古屋城下に移転し門前町として発展した。

名古屋での見世物は、結構行われていたようであるが、江戸においても記録がある。それは、須藤由蔵(藤岡屋)が江戸末期の江戸を中心とした事件や噂などを詳細に記録した日記である。

⑬は、その中の嘉永6年(1853)5月で、「山椒魚は生て居り候に付、5両にて買取、見世物に出し候よし。」と記録している。『見世物研究』(朝倉無声、筑摩書房、2002)には、藤岡屋日記の山椒魚の件が記載されており、「天保4年(1833)と同7年(1836)とに、名古屋で山椒魚を見世物としたが、文政度に散々見せた跡なので、顧る者さえなかった。然るに嘉永6年(1853)の春江戸で見せた時に、以外にも大入りであったのは、初物賞

翫の人気からであろう。此山椒魚も香具師が魚河岸で、金5両で買ったものであると記してある。」と記載されている。

やはり、いろいろと見るものが多い見世物では、オオサンショウウオは最初こそ珍しく人気が高いが、いわゆるリピーターにはなり得なかったようである。従って、見世物興行の成否をかけて、5両でオオサンショウウオを買った香具師にとっては、大変な判断であったのだろうと推察される。

⑯は、江戸の千川用水(調布市近辺から上野近辺までの人工用水で長い歴史と変遷を辿った経緯を有する)の板橋での発見記録である。平成16年の『練馬の文化財』～千川の特集～の中で、「千川の怪物」という題でも紹介されている。原本『本朝諸国風土記』(津田順敬、江戸後期)の記録を見ると、それは、「寛政十三年辛酉六月十三日、板橋宿のうら通の千川の堀で、怪物をとらへた、その形黒く長さ頭より尾まで三尺四五寸もあつた、背中は黒き肉にブツブツと一際黒く、頭は鯰に似て平く大きく、目は長くして至て細し、口の大き老尺ばかり、前の両足は指四本、後ろの両足は指五本である、腹は白く薄赤くしてまだらに縞身ぬめぬめとしてなめらかだつた、この怪物千川の水中に棲んでいたのをしらずして、兩岸の草を刈る者が発見して引き上げた、いずれにも珍しきものとて上覧(第11代将軍 徳川家斉)に入れ奉りし所、御城内に一両日とめ置かれた、その後板橋の水車を持った庄屋へ下し置かれた、実は、この怪物は去年の寛政12年の6月に板橋の先の平尾の川へ穴釣りに行った人物が見つけてカッパと間違えて大騒ぎをしたのち、音羽町護国寺の秩父三十四番の出開帳(埼玉県秩父郡皆野町にある日沢山水潜寺の千手観世音菩薩か?)の見世物にした、開帳終わって、又元の平尾の川へ捨てたが、翌年6月又人に捕えられたものであつた、これは、山椒魚の千歳を経し也ともいい、又はやもりの幾許を経しなりとも、或は岩石竜というもの也ともいった」といった内容である。

前出の文献に比べて、オオサンショウウオの長

さの記載が異なるが点は気になるが、正式な名称に迷い、“山椒魚の千歳を経し也”“やもりの幾許を経しなり”“岩石竜といふもの也”などといろいろな言い方をしている。

⑭は、江戸末期に庄内藩鶴岡に生れ、松山藩の家老から明治には教育・政治の分野等でも多才な能力を発揮した松森胤保の旅先での記録『遊覧記』に記載されている。この『遊覧記』は、天保12年(1841)から元治2年(1865)までの間の記録で、現在の管理者である後裔にあたる松森昌保氏にメールにてコピーを送付いただき、オオサンショウウオに関する部分を引用させていただくことにした。注目する具体的な内容は、江戸浅草での見世物見学の時のオオサンショウウオに関する記録であり、絵図とともに残されている。記録文の概要は次のようなものである。

「浅草奥山の境内の見世物廻りで、生人形小屋を出てから“宝龍魚”という見世物小屋に立ち入った。そこには“山椒かじか”の如くで、大きき四尺余りもある生き物が水の入った大きな箱に入れてある。頭の肌は小さな瘤のようなブツブツがいつぱいある。目らしいものはよくわからない。前の足の指は四本、後は5本であり、図に示すとおりである。・・・」



江戸浅草奥山での見世物“宝龍魚”

ここで、注目すべきは、オオサンショウウオの見世物小屋の看板は“宝龍魚”と書かれてあったことで、筆者はこれを見て、「“山椒かじか”の如し」と言っている点である。東北地方はオオサンショウウオの生息地ではないが、数種のサンショウウオ科のものが生息しており、当地では“山椒かじか”と呼んでいたのであろうか。もし博学な筆者が初めて見たものなら、その大きさに驚いたであろうが、おそらく本草学書籍等には接してい

たであろうし、知識としては当然持っていたものと思われる。

(3) 余談「黄村先生言行録」

前の記録より後世になるが、触れておきたいものとして、太宰治が三鷹での生活時代の昭和18年に発表した短編『黄村(おうそん)先生言行録』がある。この作品の中で、太宰は結構オオサンショウウオのことを詳しく調べていることを伺わせる記載が多い。井の頭公園の水族館(現井の頭文化園)でのオオサンショウウオ見学での事、甲府の郊外の温泉地でのオオサンショウウオ見世物小屋主人とのやり取り、さらには石川千代松博士やシーボルトの事、岡山県の湯原温泉の鮎大明神の事等々である。ただし、あくまでも文学作品なので事実とフィクションの線引きが出来かねる部分がある。作品を読んでいて、太宰治は『山椒魚』作者の井伏鱒二から多くの情報を得たであろうと想像し、もしかして、主人公が太宰治で、黄村先生が井伏鱒二なのだろうかと思うようになった。

4、湯島大聖堂博覧会以降

明治時代になり西洋化や殖産興業政策が推し進められ始める中、政府文部省は明治5年(1872)3月5日より湯島の聖堂(昌平坂学問所—通称昌平校)で博覧会を開いた。それは、ウィーン万国博覧会への出品準備のために、大聖堂を博物館として動植物標本、生品の他、古玩珍器などの庶物を展示したもので、連日大盛況で大いに博物学的知識の普及に貢献したという(『日本博物学史』(上野益三著, 平凡社, 補訂版-1986))。そして、この中にはオオサンショウウオの展示があったことは有名である(写真参照)。その後、この湯島聖堂博覧会(文部省博物館)の出品物をもとに東京国立博物館が日本ではじめての近代的な博物館として設立されるのである。

このように、西洋での博覧会への参加、自国での博覧会開催、上野での博物館や動物園の開館等々、世は“見世物”の新たな展開へと進んでいくことを示している。本来の金儲けのために何でも見せるといった思想から、教育や研究的な要素が



湯島大聖堂博覧会の浮世絵（昇斎一景画）
中央手前の手水鉢のような器の中にある

加わってどんどん分化していくのである。

時代を経た現在での参考として、「(社)日本動物園水族館協会」が使命として掲げている事項をホームページより挙げさせていただく。すると、「①. 命に触れる憩いの場(レクリエーション)、②. 楽しく学ぶ(環境教育)、③. 動物を絶滅させない(種の保存)、④. 動物のことを調べる(調査・研究)」と、その意義・役割の重要性が伺える。

さらに参考として、“博物館”をYahoo 辞典で引くと、次のように解説されている。

「日本では、1951年(昭和26)社会教育法に基づき、博物館法が制定された。その法律によれば、博物館とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む)し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関、と定められている。この規定のなかには、美術館、資料館(民俗、歴史など)、動物園、水族館、植物園、科学館(自然科学、技術など)が含まれている。日本博物館協会では、博物館の種類として、総合、郷土、美術、歴史、自然科学、理工、動植物があるとしている。しかし、一般的に博物館という場合には、動物園、植物園、水族館などとは区別されている。」と。

(社)日本動物園水族館協会加盟の施設で、現在オオサンショウウオを飼育している園館は25園、チュウゴクオオサンショウウオを飼育している園館は8園、アメリカオオサンショウウオ(ヘルベ

ンダー)を飼育している園館は1園である。そして3種とも飼育しているのは名古屋市東山動物園のみである(ホームページより)。

6、おわりに

今回は、見世物としてのオオサンショウウオという視点で、多くの方の論文や著書等を参考にし、引用させていただいた。オオサンショウウオが見世物とされていた事例とともに、古名と地方名が結構出てきたことで、また新たな疑問が生じることとなった。それらは“貝龍”、“阿迦魚”、“宝龍魚”、“山椒かじか”、“岩石龍”などであり、聞いたことがある名称もあるが、これらの名称については、今後検討したいと思っている。

このオオサンショウウオは、3000万年前の化石とほとんど進化なしに生き続けてきた世界最大の両生類で、岐阜・愛知以西の山間清流に棲む夜行性の生き物のため、そのような地方以外の人々にとっては、大変珍しく手足のついた魚の一種と珍重されたことが伺えた。しかし、活発に動き回るものではなく、見世物としてはすぐに見飽きてしまうこともあったようだ。

昔から、薬であり料理の対象であり、さらに見世物の対象であるオオサンショウウオは、多くの個体が生息各地から全国各地(海外にも)に持ち運ばれたことは間違いなく、意外な地方や場所で見つけられ、その地方独特の呼び方が用いられたものと思われる。

現在では、無断で触ることさえ全くの御法度であり、保護・保全が叫ばれる中、過去にどのように人々と係わりあったかを知ることにより、この奇異なる生き物に一層の愛着を感じ、少なくとも人類よりも長く地球上で生き延びていることに敬意を払い、幾末まで後世を残してもらいたいと願って止まない。

最後になりましたが、一部の引用資料については国立国会図書館関係者並びに山形県鶴岡市の松森昌保氏に多大なる協力を得ました。ここに謝意を表します。



<第2回>

- ①日時：平成23年8月27日（土曜日）
 ②場所：日本ハンザキ研究所周辺
 ③講師：笹田直樹(会員，環境調査会社所属)
 ④参加者：参加者 56名
 スタッフ21名（内兵庫県立大6名）
 ⑤当日の実施状況
 13:30 スタッフ集合、アフリカ料理、地元野菜
 の調理下準備や、煮焼きもの用炭火準備。
 17:00 アフリカ料理の食事開始。
 18:00 スタッフミーティング
 18:30 受け付け開始
 19:00 栃本理事長あいさつ
 19:20 オオサンショウウオの講義と保護池で
 の観察
 20:00 自然観察現場(黒川自然公園センター駐
 車場)へ移動。
 20:10 駐車場で自然観察会の手順説明後観察
 会開始。(再捕4、新規1)
 21:00 観察会終了、随時現場解散

⑥事務局担当者所感（白瀧）

【アフリカ料理】

アフリカ料理〈2500円〉
 の申し込み者が9名と昨
 年度の50名を大幅に下
 回る結果となった。原因



美味しそう??

としては、食事の選択を地元食（アマゴ井）と競
 合せたことやオオサンショウウオ観察会を目的
 とした参加者に取り付きやすい金額提示などの配
 慮が必要であったと思われ今後の課題を残した。
 （参加者総数27名）

【オオサンショウウオ夜間観察会】

河川増水のために観察現場を魚ヶ滝キャンプ場
 から市川最上流にある黒川自然公園センターに変
 更して実施した。この場所は、関西電力奥多々良
 木発電所上部ダム黒川湖からの放流水が主で、ダ
 ム湖周辺の降水面積も狭く突発的なゲリラ豪雨に
 よる増水も一両日中には安定した水位へと戻ると

めに観察会には全く支障のない状況であった。観
 察現場は、朝来市での第5回オオサンショウウオ
 の会夜間観察会で18cm程度の幼生が、また、その
 後、施設見学者により当歳ものが発見されており
 近辺には巣穴があることが想定される。また、川
 沿いには400mにわたり遊歩道が整備されており、
 歩道上から川底のオオサンショウウオが観察でき
 る好条件の場所でもある。今回は、環境調査会社
 に所属する3名の会員に講師として参加してもら
 い、公園センター駐車場に於いて、2グループに
 分かれ身体測定の様子や健康状態、体の特徴や食
 性などの説明と質疑応答を行った。現地は調査回
 数が少ない事もあり、新規の捕獲を得て、マイク
 ロチップ挿入実演も実施できて内容ある観察会と
 なったと思える。

総数 77名(参加者56名・スタッフ21名)
 捕獲数5匹
 (再捕4・新規1)

<第3回>

- ①日時：平成23年9月24日（土曜日）
 ②場所：日本ハンザキ研究所周辺
 ③講師：清水善吉(会員，三重自然誌の会)
 ④参加者：参加者 50名
 スタッフ 8名
 ⑤当日の実施状況
 17:30 参加者食事、温泉入浴（希望者のみ）
 18:00 スタッフ集合、ミーティング
 18:30 受付開始
 19:00 栃本理事長あいさつ
 19:20 DVDで講義とオオサンショウウオ保
 護池での観察
 20:00 自然観察現場〈黒川自然公園センター〉
 へ移動、2班に分かれてオオサンショウ
 ウオの身体測定（再捕2匹、新規1匹）
 と特徴などの講義
 21:00 終了後、随時現場解散

⑥事務局担当者所感（藤原）

今回は、取上げたオオサンショウウオの計測の様子や実物の見学だけでなく、河川内に餌取りに出ているオオサンショウウオを遊歩道からライトで照らして見学するという試みを行った。そのため、観察対象河川で、事前に4匹を確認しておき、見学者を案内してそれらが見学できた。やはり、河川内で悠々と餌待ちをしている個体が確認出来た時の感動は特別であったように見受けられた。その後、2班に分かれて、取上げた個体の計測等を見学した。

今年の3回の見学会への参加者は、大変多くなり、原則50名としたが、企画の工夫により、多くの見学者に参加いただくことができたと思う。

NHKや民法でオオサンショウウオ関連の番組等が続いたことなどにより、一種のブームの状況であろうか。



川岸からオオサンショウウオの姿を見る



二つの班に分かれての見学

(3) 湯原はんざき祭り出展

- ①日時：平成23年8月8日（月曜日）
- ②場所：岡山県真庭市湯原町温泉街
- ③講師：栃本理事長・事務局員他

④参加者：スタッフ6名

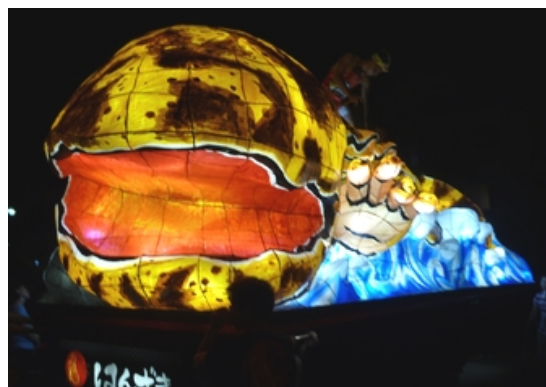
⑤当日の実施状況

- 13:30 現地到着、会場設営後、展示開始
- 16:00 はんざき大明神祭礼・山車スタート
- 19:00 お祭り開始
- 21:30 フィナーレ・花火打ち上げ
- 22:00 お祭り終了・展示片付け

お昼過ぎからお祭り終了までの間、空き店舗で展示を行い、多くの来場者がありました。



展示パネルに見入る参加者



壮大だった“ハンザキねぶた”

⑥事務局担当者所感（黒田）

お祭りの人出は、昨年度より1,000人増えて約6,000人とのことでしたが、今年は開催日が平日ということもあったのか、当研究所の展示には昨年度ほどの来場者がありませんでした。ただ、夏休みということで全国各地からお客さんが来られており、その中には子ども連れの家族も多く、オオサンショウウオを広く、たくさんの方に知ってもらう良い機会となったと思います。

(4) 銀谷(かなや)祭り出展

- ①日時：平成23年9月25日（日曜日）
- ②場所：朝来市生野町内
- ③講師：栃本理事長・事務局員
- ④参加者：スタッフ8名
- ⑤当日の実施状況

9:00 現地到着、会場設営後、展示開始

10:00 お祭り開始

16:00 お祭り終了・展示片付け

開始前後から午後3時過ぎまでの間、いつもの場所(三度目の参加ですが、毎回、裏通りにある天理教の敷地を割り当ていただいています)でハイブリッドを中心とした展示を行いました。全体の参加者は減少傾向にあるようですが、当研究所の来場者数は例年通りの賑わいを見せていたように思います。

⑥事務局担当者所感(黒田)

「やっぱり生き物は強いね(栃本理事長談)」の言葉通り、「オオサンショウウオ(ハイブリッド)を展示してますよ～」と言うと、通りがかったお客さんが、吸い込まれるようにどんどん流れ込んできました。老若男女を問わず、「こんなおっきなの、初めて見た～」、「すごい～!」、「気持ち悪っ～!」、

「意外とかわいい～♪」など、様々な声を聞きました。午後には神戸在住の老夫婦が来られ、ご主人は黒川出身とのことで、あんこう(オオサンショウウオ)を見て、ずいぶん懐かしがっておられたのが印象的でした。



私たちの受け持ちブース・展示コーナー



生きたオオサンショウウオ(ハイブリッド)は
子供達に大人気



編集後記

新しい理事や事務局員の参加によりスタートした今年度でした。ただし、あんこうミュージアムセンターの常時公開は実質不可能となり、イベント時及び事前の予約があった時のみの公開としました。やはり、理事長への負担が大きくなりすぎたためですが、今後検討すべき事項の一つです。

また、イベントもオオサンショウウオ主体の水棲動物と里山の観察(キノコ、植物、野鳥)に限定しました。まだ、前半が終わったばかりのところですが、参加される方も熱心な方が増えているように見受けられます。

さて、「あんこう7号」の編集を終え、皆様にお届けします。今回は、新たな方にもいろいろな観点で投稿いただきましたこと、感謝申し上げます。今後も多くの方に、お気軽に投稿いただくことを願っています。生き物に関する話題ならば何でも結構です。よろしくお願いいたします。

編集長 黒田 真澄

平成 23 年 9 月 30 日 発行

特定非営利活動法人

日本ハンザキ研究所

兵庫県朝来市生野町黒川 292

電話/FAX: 079-679-2939

e-mail: info@hanzaki.net

HP URL: <http://www.hanzaki.net>

